

Paul J. Griffiths, Noriaki Hakamaya,
John P. Keenan, and Paul L. Swanson;
*The Realm of Awakening: A Translation
and Study of the Tenth Chapter of
Asanga's Mahāyānasāṅgraha*

兵藤 一夫

本書は書名の副題にも示されているように、『撰大乘論』(Mahāyānasāṅgraha, ab. MS) 第十章の翻訳(英訳)を中心にした研究である。周知のように、MSはアサンガ(無着)の著作であり、瑜伽行派の立場から仏教を体系的に論述したものである。その書名からも明らかのように、この論書は大乗仏教の概説書であって、論全体が教・行・果ともいうべき一つの流れを持った構成となっている。即ち、第一章「知られるべきものの依り所」(所知依分) 第二章「知られるべきものの相」(所知相分)が教であり、第三章「知られるべきものの相への悟入」(入所知相分)から第八章「高度の慧学」(増上慧学分)までが行であり、第九章「結果としての断除」(果断分) 第十章「結果としての智」(彼果智分)が果である。従って、第十章では最終的に獲得される結果(覚り)そのものがテーマとされ、覚りの具体的な様相が、三身(法身・受用身・変化身)を中心にして説明されている。本書はそれを“*The Realm of Awakening (覚りの世界)*”と題し

て扱っているのである。

MS に関しては、これまで勝れた研究がなされている。中でも、E. Lamotte; *La somme du grand véhicule d'Asanga* (Mahāyānasāṅgraha) Louvain, 1973、長尾雅人『撰大乘論』和訳と注解上・下(東京、一九八二、一九八七)は、詳細な注記を伴った全編の現代語訳であり、この難解な論書を我々の身近なものにしてくれるものである。とくに後者は、注解というかたちで著者の解説が附され、一層我々に理解しやすくなった。筆者は本書の紹介をするに際して、この長尾博士の研究を大いに参照している。ところで、MSの本論と諸注釈のサンクリット原典は失われているので、その研究にはチベット訳と漢訳が基本資料となる。MS本論に関してはチベット訳と四種の漢訳(仏陀扇多・真諦・笈多共行矩等・玄奘)が残されている。注釈にはヴァスバンダウ(世親)の Mahāyānasāṅgrahabhāṣya (ab. MSBh) とアスヴァバーヴァ(無性)の Mahāyānasāṅgrahopaniṣandhāna (ab. MSU) があり、前者に関しては、チベット訳(脱落や落丁があり不完全)と三種の漢訳(真諦・笈多共行矩等・玄奘)が残されている。後者に関しては、チベット訳と漢訳(玄奘)が残されている。(また、作者が不詳で、第一章の途中までのチベット訳のみ残されている注釈があるが、本書には関係しないので触れないでおく。)そして、現在のMSの研究では、これらすべての訳や注釈を参照することが当然視されているが、これには佐々木月樵『漢訳四本対照撰大乘論』や Lamotte と長尾両博士の研究方法によるところが大きいと思われる。

「謝辞」によれば、著者の一人である駒沢大学教授袴谷憲昭

氏が一九八一年にウィスコンシン大学 (マジン) に客員教授として招聘されたとき、袴谷教授を中心として MS 第十巻のセミナーが持たれ (約二年間継続)、その時の研究成果が本書の核となっているようである。本書の共著者である Paul J. Griffiths

(現在ノートルダム大学助教授) と John P. Keenan (現在マニッセルバリー大学助教授) と Paul L. Swanson (現在南山大学助教授) の三氏はそのセミナーの主だったメンバーであった。このセミナーは、前述したような研究方法を忠実に取り入れてゐる。

MS 本論の諸訳と MSBh と MSU の諸訳ばかりでなく、『大乘莊嚴經論』(ab. MS4) 『阿毘達磨集論』(ab. AS) とその注釈なども参照してゐるのである。このときの成果の一つとして、既に袴谷教授は 『Mahāvīnāśvatantraprakāraḥ 最終章和訳』

『駒沢大学仏教学部研究紀要』No. 41, 1983) を出しており、そこには前述のセミナーの様子なども述べられてゐる。

このような着実な研究方法によって、MS を中心とした唯識文献に深い学識を持つ袴谷教授に指導された、新進気鋭の学者達が獲得した成果は、当然のことではあるが、我々を裨益するであろう。ただ、残念に思うことは、著者も遺憾の意を表しているが、前述の長尾博士の研究成果『撰大乘論』和訳と注解(下)を参照してゐないことである。

本書は序論と三部からなる。目次により構成を示せば次のようである。

Introduction p. 3

Part One. The Basic Text: A Running Translation of the Tenth Chapter of the *Mahāvīnāśvatantraprakāraḥ* p. 47

Part Two. The Commentaries: An Annotated Translation of the Chinese and Tibetan Versions of the *Bhāṣya* and the Tibetan Version of the *Upaniṣandhāna*, Together with Selected Parallel Texts p. 61

Part Three. The Texts: Romanized Versions of the Sanskrit and Tibetan Texts Translated in Parts One and Two p. 277

「はしがき」などによってそれぞれの部分に対する著者の意趣を略説すれば、次のようである。

序論は、第一部以下の翻訳を理解しやすくするために、MS (特に第十巻) を歴史的教義的に位置づけようとする。

第一部は MS 第十巻本論の通しの翻訳である。これは議論の鳥瞰図を与えるためである。MS 本論はチベット訳と四本の漢訳が現存しているが、ここではチベット訳を底本としている。著者はその理由を述べていない。しかし、これら諸訳は内容的に大きな相違はなく、前述の Lamotte 訳と長尾訳もチベット訳を底本としている。

第二部は MS 第十巻に対する MSBh と MSU の翻訳と

MS4 や AS とその注釈などの関連部分の翻訳である。ここでは、MS 本論を A ~ U に分節したうえで、それぞれの節の内容を要約、その節の本論の翻訳、その節に該当する部分の注釈などの翻訳をして、注記を附している。その中、MSB_h はチベット訳と真諦・玄奘の二つの漢訳（笈多共行矩等訳は重要な相違点がないので、必要に応じて注記の中で言及するにとどめる）をそれぞれ別々に翻訳し、MSU はチベット訳のみを翻訳し、玄奘の漢訳と大きく異なるときは注記において言及している。同じテキストに対する諸訳をそれぞれ別々に翻訳することに関して、著者は次のようにその意義を述べている。諸訳を別々に翻訳すれば、重複する部分もでてくるが、異論や附加などを明らかにし、ひいてはインドからチベット・中国への教義的な展開をも明らかにするであろう。ところで、本書の MSB_h に対するこの態度は、次のような点からも妥当なものと思われる。既に指摘されているように、MSB_h のチベット訳は不完全であり、脱落や乱丁も多い。特に第十章はその大半が欠けており、利用できない。また、MSB_h の真諦訳と玄奘訳は、内容的に相当異なる部分があり、とて同じサンスクリット原典から翻訳したものととは思えないような箇所もある。これは、訳者の解釈が附加されたためであろう。とくに真諦訳にはこの傾向が著しいようである。従って、現状では、MSB_h のオリジナルな内容の確定は困難であり、それぞれ別なものとして翻訳しておくべきであろう。それに、古くから真諦と玄奘の唯識解釈の違いが議論され、現在でもそのことが大きな問題の一つでもあるので、両訳

を別なものとして並べておくことは意義のあることでもある。後に紹介するように、MSB_h の真諦訳と玄奘訳の違いについては「序論」の最後のところ (§ 15.16) で具体的にかなり詳しく論じられている。

また、著者は、チベット訳と漢訳から翻訳するときの態度の違いについても触れている。チベット訳から翻訳するとき、チベット訳の性格からして、可能な限りサンスクリット原典を想定して翻訳する。これに対して、漢訳からの翻訳はそのままの形・文体で翻訳する。サンスクリット語を知らない中国の読者が感じたであろう中国語としての香を伝えたいためである。即ち、チベット訳からの翻訳はサンスクリット原典の含意するものを、漢訳からの翻訳は漢訳テキストの含意するものを願慮して行なわれているのである。このため、本書では MSB_h の漢訳に引用される MS 本論とチベット訳からの MS 本論の翻訳が違うという奇妙なことが生じてくるが、それは前者に何らかの意味上の附加がなされたという著者の判断を示していることになる。ただ、この著者の態度はやや安易すぎるようにも思われる。確かに、チベット訳の方が漢訳に比べてサンスクリット原典を逐語的（訳語・文体・格変化なども含めて）に訳しており、サンスクリット原典との親近性から言えばチベット訳の方が高いが、一旦訳されてしまえば両訳はそれぞれの言語の枠内で理解されることになる。チベットの読者がサンスクリット語を知らないことでは中国の読者と同じであり、また中国語の香といっても漢訳仏典の漢文は一般の漢文とかなり違った特異なもの

であるから、著者の言うように漢訳だけを特別視する理由はな
いように思われる。重要なことは諸訳の間に見られる相違点で
あって、これは訳された言語に起因するのではなく、主に訳者
自身あるいは訳者の受けた伝統に起因するのである。このこと
は、サンسكريット原典・チベット訳・漢訳の三つがそろって
いるテキストを読むときに我々がよく経験することである。

第三部は、第一・第二部の翻訳の底本となったテキストの中、
サンسكريット原典とチベット訳のみをローマ字表記したも
のである。真諦訳と支婁訳の二つが除かれたことは、著者も言っ
ているように、読者にとっては残念なことである。著者は明言
していないが、多分、本の分量と編集(版下作成に英文ワープロを
使用したようである)の都合で割愛したものと思われる。

本書は四人の共著であるが、一部分は分担されたようである。
その分担は「謝辞」の中で次のように述べられている。「序論」
は袴谷憲昭氏との議論を基に John P. Keenan 氏が執筆する。
袴谷憲昭氏は *MSU* のチベット訳からの翻訳草稿を作る。Paul
L. Swanson 氏は *MSB* 真諦訳の大部分の翻訳草稿を作る。
John P. Keenan 氏はすべてのテキストのタイプ原稿を作成し、
漢訳からのすべての翻訳の最終原稿に対して責任を負っている。
Paul J. Griffiths 氏はチベット訳のデルゲ版と北京版を照合し、
袴谷憲昭氏と共同で *MSA* とその注釈、*MS* とその注釈に見い
だされる関連文(サンسكريット)を翻訳する。その他は全員の
共同作業のようである。

本書には相当長い「序論」が附けられているが、ここでは
MS 第十章の法身の問題の背景に關係した議論の中で重要と思
われるものだけを紹介する。

瑜伽行派の三身論が明白な形で論じられるのは *MSA* の第九
章が初めてであろう。そこでは法界の働きとして三身が描かれて
いる。それに対し、*MS* 第十章は *MSA* から偈頌を頻繁に引
用し、その論書と密接な関係があることは明らかであるが、三
身の扱い方は異なっている。そこでは三身は法界の働きとして
ではなく、勝れた智として描かれている。『中辺分別論』(ab.
MAN) ステイラマティ(安慧) 釈には、法身を清浄な法界である
とする説と働きをもった勝れた智であるとする説の二つがあっ
たことが紹介されており、後の『成唯識論』は前者の立場をと
っている。相当早い時期に法身に対してこの異説が生じたよう
であるが、この違いはそのまま *MSA* と *MS* には適用できな
い。*MSA* (*MAN*, 『法法性分別論』(ab. *DhDhT*) も同) は法界ある
いは法身から智を排除していないし、アサンガも前述の二異説
を念頭に入れて後者の立場から *MS* 第十章を書いたとは思え
ないからである。(§ 5, 6)

それではアサンガの意図は何なのか。著者は次のような仮説
を提示する。*MS* 第十章は、法身が智を含んでいるかどうかと
いう問題よりも、法身と智によって表現される空性の理解の問
題を巡って書かれたのである。即ち、法身を空として理解する
ことと空でないものとして理解することを対比させる中で法身
を論じているのである。その背景として、如来藏思想の伝統が

推測されている。その伝統は、法身を空ではない実在であるとして、空性を超えて設定するものである。これは、もっぱら空性に焦点を当てて説く般若経の無的で否定的な捉え方に対する有的で肯定的な捉え方として、般若経が作られて間もなく現われてきたものである。しかし、この仮説では、アサンガがMS第十章において特に法身を清浄な法界として表現しなかったことを説明することはできない。(S. 7, 8)そこで、著者はさらに次のような仮説を提示する。アサンガは『増不減経』『勝鬘経』などに見られる法身なる如来蔵の概念だけでなく、『宝性論』(ab. RGV)に見られる教義にも反応しているのである。

RGVの本偈はマイトレーヤに帰せられており、それがMAVなどの著者と同一人物であるならば、当然アサンガはそれを知っている。また違うとしても、彼がRGVの初期の版を知っていたことは考えられる。RGVには、法身を法界と等しいとするばかりでなく、空性を超える法身の概念が見られる。ただ、RGVの本偈には、アサンガが批判するような真実としての法身の考え方があるとは思えない。従って、それは、RGVが本偈の「本性清浄」「清浄法界」などの概念を『増不減経』『勝鬘経』などの法身なる如来蔵の概念によって理解したため生じたものであろう。(S. 9)

さらに著者は問題を次のように展開する。マイトレーヤに帰せられるMSA, MAV, DhDVは必ずしもRGVの如来蔵思想に結び付くものではないが、それらの論書はその可能性を内包している。MSAなどは、本性清浄心を是認することを出発点

とし、その心が偶来的な煩惱によって汚される理由を説明しようとする。また依他起性に関しても、もっぱら迷乱の所依として説明されるだけで、清浄な依他起という概念は見られないからである。この可能性を排除するためにMSにおいて、アサンガは輪廻的な汚れの所依としてのアーヤ識を出発点とし、雑染と清浄の二面性をもった依他起性を中心とした三性説や唯識説を展開する。これらの考えはMSAなどのマイトレーヤのテキストにはなく、『大乘阿毘達磨経』『瑜伽論』『解深密経』において強調されているものである。従って、MS第十章の背景を考える場合、RGVの注釈との関わりばかりでなくMSAなどの如来蔵思想的傾向をも考慮しなければならない。(S. 10)

アサンガの議論の背景に如来蔵思想に対する批判が潜んでいるという著者の仮説は、非常に興味を引く。ただ現時点ではRGVの著者や成立などの問題も含めて、未解決でさらなる検証が必要なものが多い。これからの研究で明らかになることを期待したい。

次に著者は、如来蔵の影響の下では瞑想者達が受用身・変化身を具体的に捉えられる恐れのあることを指摘したうえで、MSでその二身の扱い方を述べる。著者は、アサンガが法身(自性身)を空と理解する立場から他の二身を論じている、という。(S. 12, 13)

最後に著者はMSの注釈者と訳者について言及している。テキストを読む場合、注釈は非常に有益であるが、そのテキストに対する注釈者の理解の正確さ・忠実さはどうかという新た

な問題が生じる。このことは翻訳者に関しても同じである。先にも述べたように、*MSB* はネット訳が不完全なことも相俟って、この問題が如実に現われている。特に、真諦と玄奘の翻訳の違いは長い間議論されてきたものであり、現在でも決着されていない。そこで著者は、*MSB* の第十章の両者の翻訳を詳細に比較検討することにより、この問題を見直している。

著者は次のように述べる。真諦訳は他訳のほぼ二倍の分量であり、多くの附加がなされている。真諦が必ずしも単純にサンクリット原典を翻訳しているだけではないことは確かである。従って、宇井博士の「真諦は古典的なインドの瑜伽行派の本来の伝統を代表している」という説は完全には支持し得ない。真諦はヴァスバンドウの原典に多くの附加をしているが、その附加の多くは如来蔵の系統のものである。しかし、このことは、真諦がインドの瑜伽行派の師達に忠実でないこと、瑜伽行派の思想に混雑物をして不純にしたことを意味するのではない。むしろ、真諦はアサンガ以前のマイトレーヤに帰せられる文献の如来蔵思想的解釈を引き出し、それを受け入れたのである。ただ、このことはそれを避けようとしたアサンガとは鋭く対立する。これに対して、玄奘訳には多くの附加は見られないが、重要な解釈の織り込み、即ち護法的解釈の織り込みがなされている。(それは *MSB* ばかりでなく *MSU* に於ても見られる。) しかし、このことも、玄奘がインドの瑜伽行派の思想に忠実でないことを意味するのではない。護法の系統は、一切の如来蔵的観念を避けようとするアサンガの批判的な思想の枠組みの中で正直で

あろうとする試みであるからである。以上のように、真諦と玄奘の解釈の違いは、インドの初期の瑜伽行派の思想的な系統の相違をそのまま受けているのである。(3 14, 15, 16)

本論に当たる第一部・第二部は翻訳である。翻訳は全体的に良くこなれた平易な文章となっている。術語も簡潔に分かりやすく訳されており、原語 (Skt) のままに残したり挿入したりすることを出来るだけ避けている。著者達の理解の深さの一端を見る思いがする。以下に、翻訳の中で気づいたところを記しておく。ただ、翻訳を検討するという性格上、筆者が疑問に思う箇所ばかりを取り上げることをお許し願いたい。実際はここで指摘するよりも遙かに多くの点で、筆者は本書に教えられ恩恵を受けているのである。

第一部は先にも述べたように、*MS* 本論の通しの翻訳である。翻訳に際しての分節は、ほぼ Lomotte 本に基づいている。ただ、Lomotte 本に比べて相互の関係を分かりやすくするため工夫の跡が見られる。

§ B3d, *MSA* (IX:77) からの引用例の後半部分 “naikabuddhatvan bahutvan” を “Buddhahood is neither one nor many” (p. 50, l. 9) と訳しているが、*na* は “buddhatva (Buddhahood, 仏陀たること)” が一でも多くでもないのではなく、一仏であること (ekabuddha-tva) でもなく多仏であること (bahubuddha-tva) でもないこと、即ち Buddha が一でもなく多でもないことを言っているのではないか。ネット訳・諸漢訳、

注釈などもその意味である。Lanotte 訳「長尾訳もその意味にわたっている。

§ C: 最後の *འཇམ་མཉམས་ཀྱི་* “de dag gis gnas gyur pas thob po” や “[Dharma Body] is thus acquired through the conversion of support” (p. 50, 11. 23-24) を訳しているが、“de dag gis” の意味が明確でない。訳されているのか、あるいはもつ “thus” を訳しているならは適當ではないであろう。漢訳の中では仏陀扇多訳のみが「依彼身軀故」としてこの語を訳出しているようであるが、他の漢訳にはなく、注釈も言及していない。何を指示しているか決め難い語であるが、長尾訳では「それら[二つの智]によって依り所が転回されて[法身]を得るのである」となっている。(傍線、下線は筆者、以下同じ)

§ I. 1: 偈の最後の部分 “zas bzhi po ni gsol ba lags” の訳が “And eats the four foods.” (p. 53, 1. 42) となっている。訳語としては誤りではなすが、下線部(四食)には問題があることを注記すべきであろう。仏陀扇多訳を除く三漢訳がいずれも「第四食」と訳し、注釈にも「第四」の内容が仏陀の食のあり方として説明されている。長尾訳も「第四」を採用し、その内容に言及している。

§ I. 4: 偈の第三句 “’dod chags ’dod chags min mkhyen nas” 24 “Having known desire and non-desire” (p. 54, 1. 14) と訳されている (Lanotte 訳も同じ)。しかし世親・無性の注釈から考えて、長尾訳のように「貧欲も」「実は」「貧欲ではないことを知って」という意味であろう。漢訳もすべてそう読

むことが可能である。(注釈の英訳はその意味に訳されている)

§ O: 著者は本節の結論である「受用身が自性身であることは不合理である」の理由句を誤って理解しているようである。

“... snang ba dang | ... snang ba dang | kun gzhi rnam par shes pa dang | jug pa'i rnam par shes pa gnyis gnas gyur pa mi rigs par snang ba'i phyir longs spyod rdzogs pa'i sku ni ngo bo nyid kyi skur mi rigs so |” は下線部の “phyir” が理由を表しているが、それはそれまでに出ている六つの “snang ba” すべてを受けたものとなっている。諸漢訳と注釈もその意味に理解しており、Lanotte 訳「長尾訳もさうである。しかし、著者は最初の五つの “snang ba” をそれぞれ独立させて、最後の “snang ba” のみを理由として “Because of the dissimilar appearance of the two conversions of support, that is, those of the container consciousness and the active consciousness, the Enjoyment Body is different form Essence Body.” (p. 57, 11. 24-27) と訳している。このため、§ O の六つの理由が何ひあるかがあまりになっていく。

次に、第二部に関して気づいた点を記す。第二部は本書の中心をなすものであり、分量的にも全体のほぼ六〇%を占めている。先に述べたように、*MSBh*, *MSU* や *MS4*, *AS* などの関連箇所がそれぞれ別々に翻訳されているが、ここでは筆者の能力的・時間的制約と紙幅の関係で、主に *MSU* についてだけ述

をこのこととする。(ふすれにへんつとMSBの真諦訳と女婁訳の部分を読み比べてみたことと思ふこと。)

§ A1 *MSU*; “chos namns kyi sku ni chos nyid kyi sku'o”
を “The body of things is the body of the true nature of things.” (p. 68, 11. 32-33) と訳しているが、この前半は文意が不明瞭である。このはチキヤット訳自体に少し混乱があるのではないかと思われる。当該部の女婁訳は「法性即身故各法身。或是諸法所依止処故名法身」とあり、「法身」の二通りの語義解釈をしようとするのである。一は「法性が即ち身であるから「法〔性〕身」である」という *karmadharaya* としでの解釈であり、もう一は「諸法の所依(身)であるから「法身」である」という *taṭpuruṣa* としでの解釈である。チキヤット訳はこの二つの解釈を混同したのではないかとと思われる。

§ F2 *MSU*; “de gyur pa yang sngon byung ba'i tshul gyir nam par smin pa nyid du gdags te” を “Although they have been converted, they yet continue in their mature state due to the former practices [of the bodhisattva].” (p. 117, 11. 6-7) と訳し、女婁訳と異なっているためそれを注記している。しかし、これは下線部をデルゲ版の “gnas” とでも考えたのか、第三部のテキストでは “gdags” を採用しているが、訳語が不適当ではないかと思われる。“gdags pa (prajñapti)” は「仮説する」という意味であるから、上のチキヤット訳は「それが転じて、以前に生じたあり方に基づいて異熟したものと仮に呼ばれるのである」ということになる。女婁訳「仮説転得

亦名異熟、如昔所得異熟諸根」と同じ文意であろう。

以上に述べたもの以外に、些細なことではあるが気づいたところを次に列挙しておく。

§ F6; “…is gained upon conversion of the removal of all misfortunes and mistakes.” (p. 51, 1. 27) は上線部の “conversion of” が脱落していると思われる。

§ 112; 後半部の § 1 のための翻訳がすべて脱落している。(p. 55, 1. 7) しかし、第三部はその部分は訳されている。

§ B3d *MSU*; “gang la gzhan zhes bya ba ni nam par good pa yod pa de na |” (p. 88, 1. 8) の訳が欠けている。

§ H8 *MSU*; “dmigs yongs su dag pa ni sngon med pa'i gzugs sprul pa dang | …” (p. 148, 1. 8) の下線部の訳が欠けている。

以上、全く不十分な形でしか本書を紹介できなかった。本書は *MS* の第十章という重要な章の研究であり、これまで *MS* 研究の着実な成果の中に加えられるべきものの一つである。しかし、本書の価値はそれに尽きるものではない。三身に関して *MS* と関連する箇所をも集めているため、「仏身論」の研究の重要な資料・成果としても利用できるであろう。

(Oxford University Press, New York, Oxford, 1989, 15.3 x 23.5cm, xx + 399 pages.)